

苦小牧駅周辺ビジョン策定検討委員会 第3回委員会資料

2022.0726



本資料には、著作権法に定める検討の過程における利用等として、著作権者等の許諾を得ていない著作物等が一部に含まれている可能性があります。このため、この資料は検討資料としての使用のみに留めて頂くことを予定しておりますのでご了承ください。

基本情報__ウォーカブルの概念とそれを実現する為の主要要素

「居心地が良く歩きたくなるまちなか」のイメージ

Walkable

歩きたくなる

Eye level

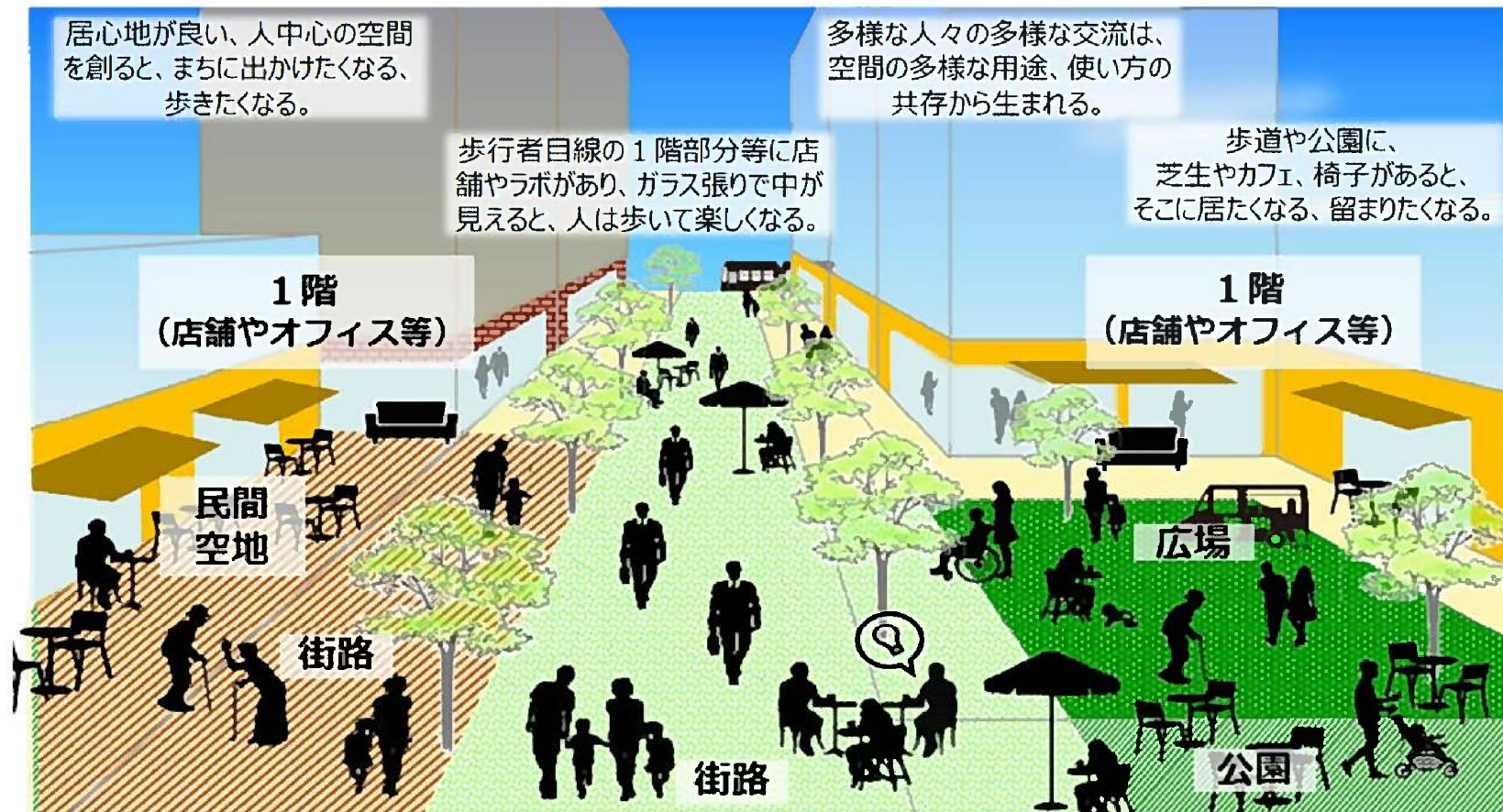
まちに開かれた1階

Diversity

多様な人の多様な用途、使い方

Open

開かれた空間が心地よい



出典__ウォーカブルなまちづくり - 国土交通省

以下の4つの視点で事例や取り組みをリサーチ・整理しました

視点① ウォーカブルを実現する **ストリートデザイン**

視点② ウォーカブルを実現する **ハードデザイン**

視点③ ウォーカブルを実現する **ソフトデザイン**

視点④ **雪国や寒冷地**ならではのウォーカブルな取り組み

以下の4つの視点で事例や取り組みをリサーチ・整理しました

視点① ウォーカブルを実現する **ストリートデザイン**

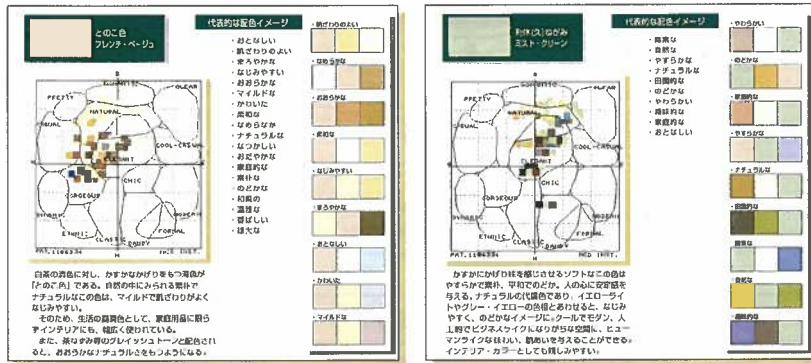
視点② ウォーカブルを実現するハードデザイン

視点③ ウォーカブルを実現するソフトデザイン

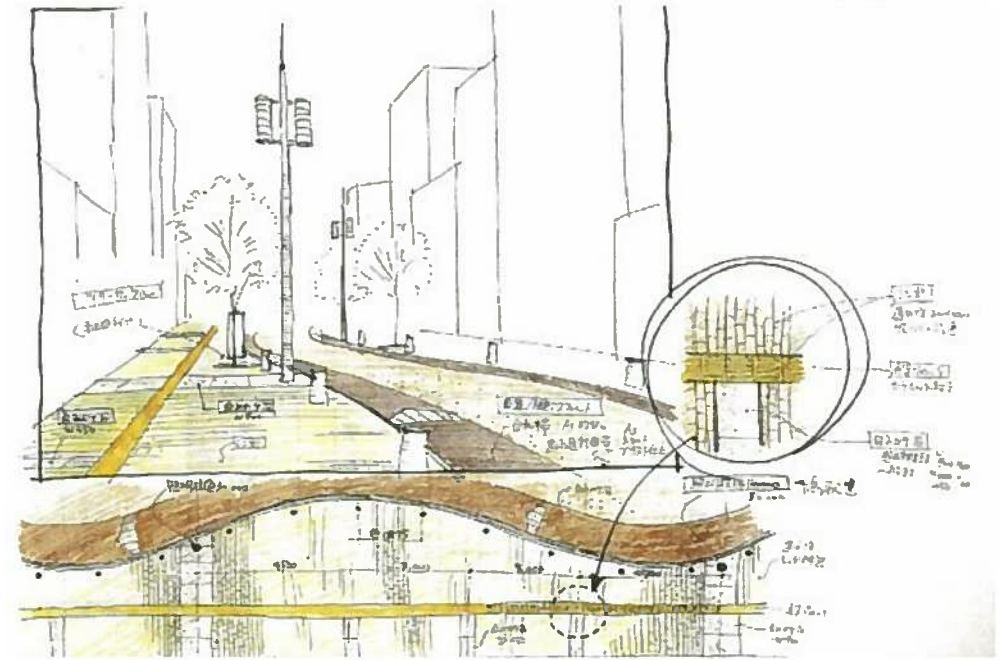
視点④ 雪国や寒冷地ならではのウォーカブルな取り組み

参考資料_作成されたデザインコード

■カラーコードサンプル例



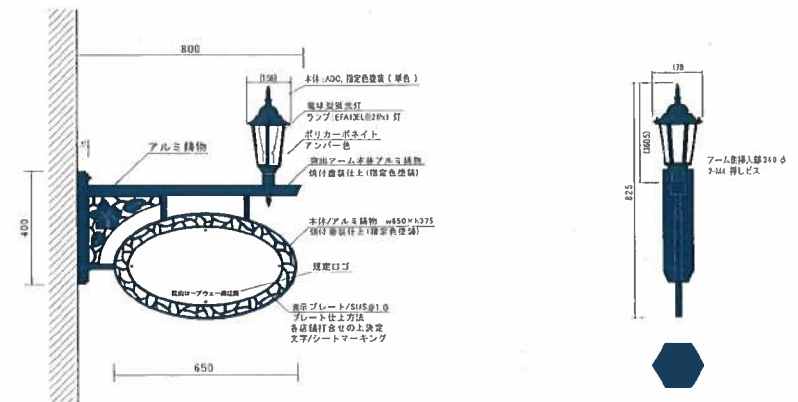
■デザインイメージのスケッチ



■外壁仕上げ例



■看板デザイン例 (突出し看板)



大手町通り



歩道活用/デザイン

ガイドライン

戦略的な手法で歩いて楽しい通り を目指す「大手町通り」 (兵庫県 姫路市)

姫路駅と駅前広場の再整備に伴い、姫路駅と姫路城をつなぐ大手町通りのあり方が見直された。事務所ビルが立ち並び、日常的に歩く場所として利用されていなかった通りの使われ方を、沿道事業者とともにくつろぎの場の提供やにぎわい創出を図るよう転換された。

【ポイント】

- ・ 3つのゾーンを設定するなど戦略的な手法により道の性格、あり方について考えられている。
- ・ 「外曲輪・おもてなしゾーン」は休息空間を目指し、緑化や花壇を多く配置。
- ・ 「商業賑わい・活用ゾーン」にはイベントスペースを整備して、実証事業「ミチミチ」を開催。
- ・ 「中曲輪・城前庭ゾーン」は姫路城をゆっくり眺めながら歩けるよう歩道を拡幅。





歩行者の安全と過ごしやすさを実現する通り「さかさ川通り」 (東京都 大田区 蒲田)

曲線状の車道が特徴的なつくりの通り。「いつも何かが行われている街路の楽しみ」をデザインのテーマとして、イベント利用のしやすさ、空間的な連続性に配慮しており、歩道と車道のデザインを一体的に施したり、植栽やベンチ、サイン計画までデザインされている。

【ポイント】

- ・あえて車が通行しにくい作りとなっていることが、自動車の通行速度を抑制することにつながり、歩行しやすい空間となる。
- ・曲線の凹凸部はテーブルを置けるようになるなど、歩行者専用空間を車両通行止めなどすることなくナチュラルに整備可能。

以下の4つの視点で事例や取り組みをリサーチ・整理しました

視点① ウォーカブルを実現するストリートデザイン

視点② ウォーカブルを実現する**ハードデザイン**

視点③ ウォーカブルを実現するソフトデザイン

視点④ 雪国や寒冷地ならではのウォーカブルな取り組み

FUJIMI LOUNGE



オフィス

カフェ/食堂

ラウンジ

住民との接点を持つことが にぎわい創出につながる オープンなオフィス

オフィスの一部をカフェやラウンジとして地域に開放することで、地元住民が地元企業と交流できるタッチポイントを創出する事例が数多く登場している。

SUPPOSE 社食堂



【事例】

「FUJIMI LOUNGE」(東京都 調布市)
建築事務所の一部を開放した地域交流ラウンジ。
模型室を工作室に、資料室をブックカフェとして
まちに開く。バス、徒歩、シェアサイクルの
乗り換え拠点としての側面も。

「SUPPOSE 社食堂」(東京都 渋谷区)
従業員はもとより社会の健康をデザインするこ
とを軸に考えて、オフィスの半分を一般の方が
利用できる食堂として開放。クリエイティブな
デザインオフィスの雰囲気味わえる。



多様な過ごし方が可能なカフェが 地域交流拠点となる 「喫茶ランドリー」

「私設の公民館」をコンセプトに作られたカフェ。名前の通り喫茶店とランドリーを併設した施設であるが、様々な備品を借りることができたり、店舗内を地域イベントのために貸切利用できるなど、子供からお年寄りまで気軽に訪れることができる。

【ポイント】

- ・ランドリー機器やミシン、アイロンを備えた「まちの家事室」という部屋があり、時には子どもの遊び場となり、時には打合せやワークショップが行われる部屋となる。 **過ごし方の自由度が高い。**
- ・誰でも自由な使い方ができるカフェがあることで、地域の人々が集まり、交流を促す拠点として機能する。



ワーキングスペース



キッズスペース

Caféスペース

子育て層が街との接点を持つきっかけとなる施設 「ママスクエア」

ワーキングスペースとキッズスペースを併設した施設。子育ての忙しさから地域へ出向く機会をもてなくなる女性のために、子育てを続けながらも無理なく安心して働ける環境を提供。また施設運営者が各企業から受託したアウトソーシング業務を用意するなど、雇用機会の創出も手助けする。

【ポイント】

- ・ 子供を見守りながら業務に集中できる環境があることが、街に出向く抵抗感を下げることにつながる。
- ・ キッズスペースではサポートスタッフが子どもの世話をを行い、その様子をガラス越しに見ながらワーキングスペースで業務に集中できる間取りとなっている。
- ・ 施設運営者が業務を用意することで、繁忙から職探しに従事できない方も受け入れることができる。

以下の4つの視点で事例や取り組みをリサーチ・整理しました

視点① ウォーカブルを実現するストリートデザイン

視点② ウォーカブルを実現するハードデザイン

視点③ ウォーカブルを実現するソフトデザイン

視点④ 雪国や寒冷地ならではのウォーカブルな取り組み

おおみやストリートテラス



ストリートランチ



イベント

空地/歩道活用

実証事業

イベント開催で低未利用地ににぎわいをつくる「おおみやストリートテラス」 (埼玉県 大宮市)

低未利用地や空地を利活用して、広場・休憩・店舗・駐輪等の機能を持つ場を仮設的に創出し、そこでカフェ出店等イベントを行う。この実証事業の中で、「ストリートランチ」というプロジェクトも進められる。

【ポイント】

- ・今後整備される道路の**拡幅予定地**や、青空駐車場などを活用している。
- ・**「ストリートランチ」**はイベントによるにぎわいが日常的な風景として根付くよう開催される。はじめはテイクアウト1店舗・週1回（2か月間）から開催をはじめ、**徐々に**イートインや店舗数、日数を増やすように進めている。

1M 県庁通りプロジェクト

1M

KENCHO-DORI PROJECT

DEMONSTRATION EXPERIMENT

OKAYAMA

みんたを寛みあげまらげ楽しくなる

2019.9.28^{TUE} - 10.02^{FRI}



路面店舗拡張

実証事業

空地/歩道活用

店舗の賑わいを滲み出すため、無理せず習慣化を目指す
「1M 県庁通りプロジェクト」
(岡山県 岡山市)

歩道を拡張する工事が予定されている県庁通りにおいて、道沿いにある店が歩道拡幅後、日常的にどのように歩道を活用するか検討するために行われている社会実験。



1M

KENCHO-DORI PROJECT

DEMONSTRATION EXPERIMENT

OKAYAMA



【ポイント】

- ・日常のなかで沿道の商業者等が無理せず使える空間として歩道のうち軒先1m程度の空間に着目している。
- ・沿道の店舗等が自由に使えるようにして沿道の活動が歩道に滲み出すことでにぎわいを創出する試行的な取り組みとなっている。
- ・イベントとしてではなく、日常使いにフォーカスして取り組むことで、無理せず続けられる仕組みと使い方を模索している。



イベント

車道活用

多世代交流

一時的に車道を利用転換して歩行者の居場所をつくる

車が行きかう道路を、人工芝を敷設して滞在できるようにしたり、通行止めした路上でイベントを開催するなど、歩行者専用空間とすることで、歩行者が活動できる居場所が確保され、にぎわいを生み出す取り組みが様々な事例で見られる。

【ポイント】

「ストリートパーティ」

(千葉県 柏市)

・日曜・祝日に歩行者天国となる駅前通りを利用して、定期的で開催されるイベント。子どもとお年寄りの交流機会を設けることを大きな目的としている。路上ではベイゴマなど昔ながらの遊び方教室を開催したり、人工芝上にはこたつを設置してくつろげるようにしたりするなど、多様な過ごし方がみられた。

金沢21世紀美術館



立川グリーンスプリングス



アート

体験デザイン

アートの力で特別な体験を与え、歩くことを楽しくさせる

街路や公園などにアートを配置することで、見たり触れたり感じたりできる特別な体験を提供することにつながり、その道を歩くこと自体を楽ししいものに変えていきます。

【ポイント】

- 「金沢21世紀美術館」（石川県 金沢市）
 - ・美術館周辺の広場には、目で、耳で、感触で楽しめるアート作品が設置される。アートの体験は無料で可能。
- 「立川グリーンスプリングス」（東京都 立川市）
 - ・商業、ホテル、ホールの複合施設の中に、地元出身者らのパブリックアート作品を点在させている。

Marunouchi Street Park



ストリートファニチャー

屋外オフィス

実証事業

滞在スペースとなりウォーカブルに貢献するアイコン的な設置物

まちの中にアイコン的なデザインのストリートファニチャーやパークレットなどの仮設物を点在させて、歩行者を寄り道させたり、滞在させたりすることで回遊性の向上を図る取り組みが様々な事例で見られる。

大手前通り活用チャレンジ”ミチミチ”



【事例】

「Marunouchi Street Park」

(東京都 中央区 丸の内)

・多様化するライフスタイルへの適応を検証する社会実験プロジェクト。「**就業者の快適性**」計測にて、緑豊かな屋外空間を提供している。

「大手前通り活用チャレンジ”ミチミチ”」

(兵庫県 姫路市)

・「エリアの個性の『にじみ出し』が彩る大手前通り」というキャッチコピーをかけた、**日常的に過ごしやすい環境づくり**に取り組む。

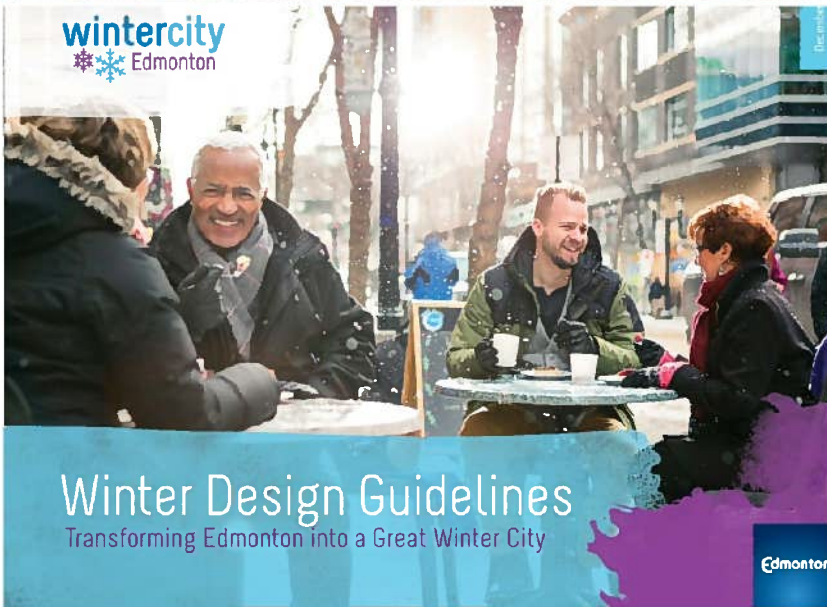
以下の4つの視点で事例や取り組みをリサーチ・整理しました

視点① ウォークブルを実現するストリートデザイン

視点② ウォークブルを実現するハードデザイン

視点③ ウォークブルを実現するソフトデザイン

視点④ **雪国や寒冷地**ならではのウォークブルな取り組み



冬のデザインガイドラインを規定することで、冬でも賑わいが生まれるまちづくりを実現する 「Winter Design Guidelines」 (カナダ エドモントン)

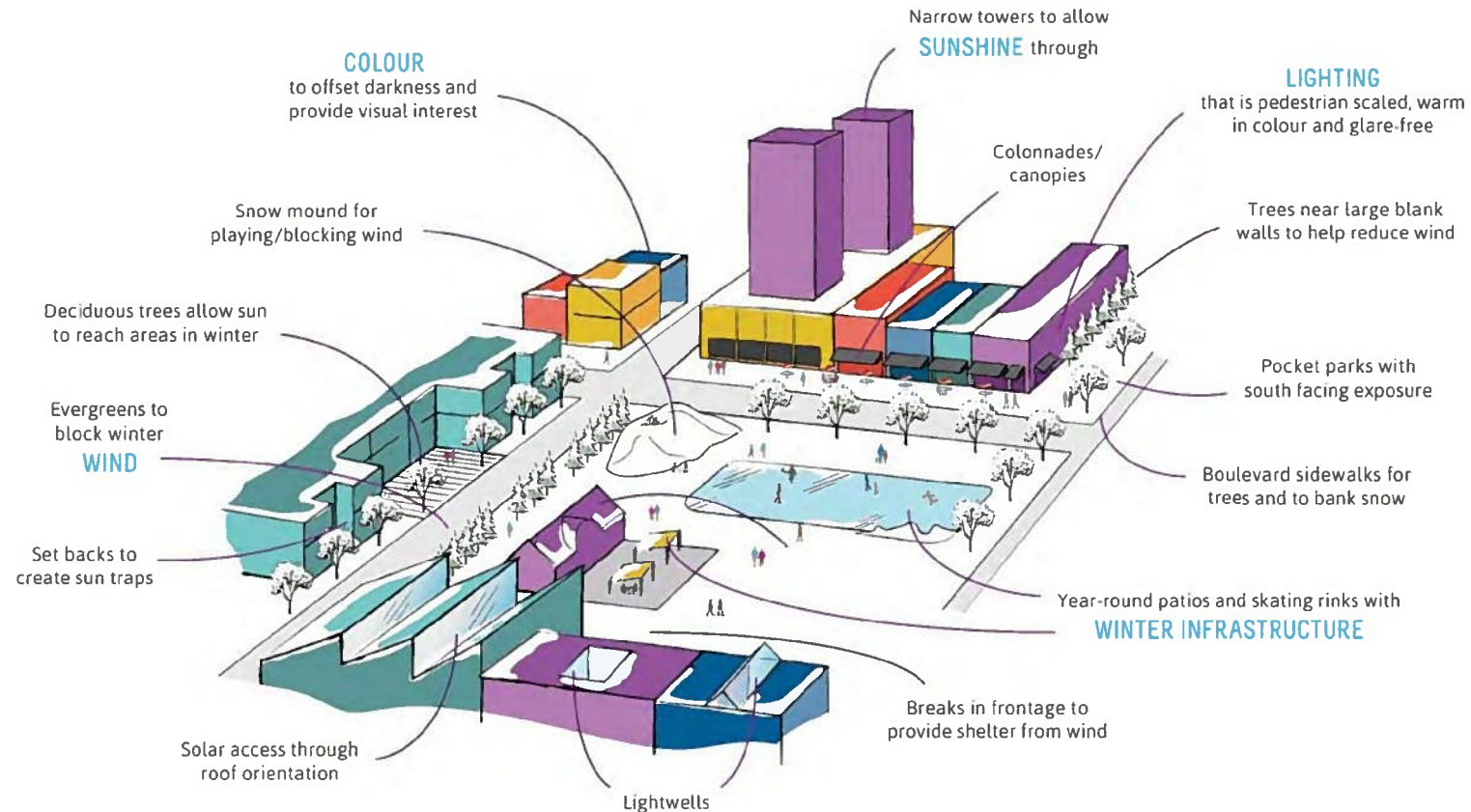
世界の旅行先都市ランキング50に選出※される都市エドモントンは、冬の気温が -40°C まで下がることがある極寒都市である。エドモントンでは冬季でも機能するインフラ整備のための「**Winter Design Guidelines**」を策定することで賑わいが途切れないまちづくりを実現している。

冬季における街が安全で、快適で、そして美的に**心地よい**と見なされるかどうかは、屋外のパブリックスペースにおいて、広い意味での「**暖かさ**」を提供することが不可欠だと述べられている。その「暖かさ」を提供するため、ガイドラインでは冬季の街に求められる機能をいくつか**規定**している。

※ <https://am.pmedia.jp/2019/02/25/edmonton/>

Winter Design Guidelines 概要

PRINCIPLES OF WINTER DESIGN

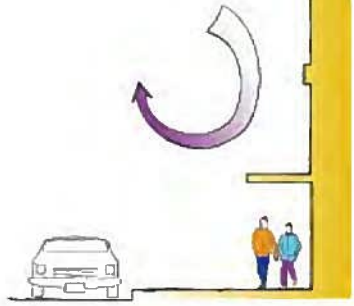


Winter Design Guidelines の主なポイント

- 風を遮断するための設計戦略を組み込む
- 向きとデザインを通じて日光への露出を最大化
- 色を使って街並みを盛り上げる
- クリエイティブな照明を戦略的に使用して視覚的な興味を引く
- ニーズのある冬季イベントをサポートするインフラストラクチャを提供する

Winter Design Guidelines_既定の例

キャノピー等



- ・風除け、採光による防寒対策のため、ガラスなど透明素材のキャノピーやアーケードをメインストリートの沿道に設ける。

マテリアル



- ・熱を吸収するレンガや石などの素材を選び、視覚的な興味を引く色を設計すること。

ライトアップ



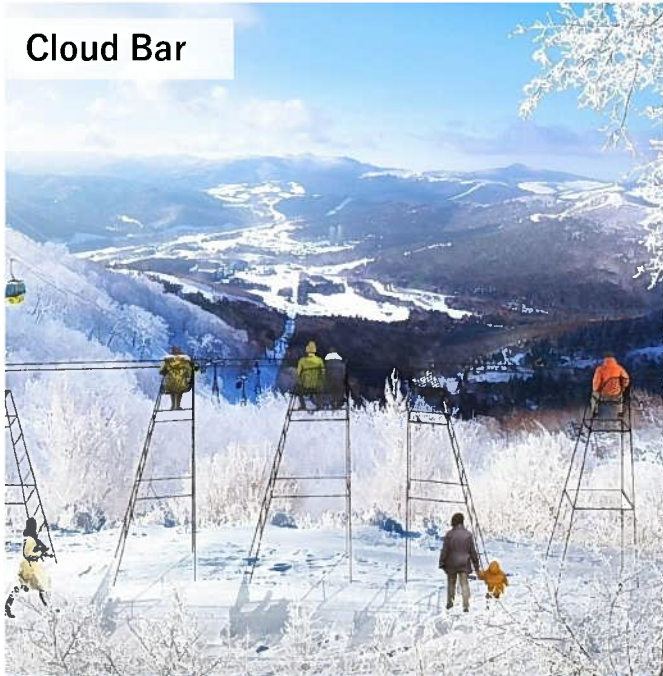
- ・建物ファサードには美観を高めるもの、街灯には暖かい色見の照明を配置する。
- ・グレアやまぶしさ対策にむけ、間接照明など工夫をする。

アクティビティ



- ・屋外アイススケートリンクなどアクティビティスペースは人気が高く冬季イベント開催にも有効。
- ・暖の確保のために火気使用設備を設置する。

Cloud Bar



Cloud Bed



ストリートファニチャー

体験デザイン

雪国/寒冷地

雪国ならではのデザインをもつストリートファニチャー (北海道 勇払郡)

北海道最大級の滞在型リゾート「星野リゾート トマム」は、ストリートファニチャーに雪国ならではのデザインを多数取り入れている。雲海、雪景など絶景を楽しめるスポットであり、絶景を楽しむために工夫されたデザインは、雪がふるエリアならではの体験デザイン。

【ポイント】

- ・「Cloud Bar」：雲海や朝日などの絶景を眺めることができるバーカウンターをイメージした展望スポット。椅子についているハシゴを登ると、積雪時に山々の風景の中に浮かぶように座ることができる。
- ・「Cloud Bed」：雲をつくる「雲粒」をイメージした展望スポット。弾力のあるクッションが連なって設置され、雲の上にいるような気持ちで雲海を眺められる。

国内外で先行している具体的な「モビリティハブ」の事例について

事例 1



「MaaSアプリWienMobilを用いたモビリティハブの推進」 (オーストリア ウィーン)

ウィーン市は、カーボンニュートラルを実現していくため、自家用車を所有せずとも移動できる社会の実現を目指し、公共交通機関とカーシェアリングや自転車シェアリングなどを統合したモビリティハブを推進している。2017年6月にMaaSアプリ「WienMobil」を市民向けにリリースし、市内の利用可能なすべての交通機関にスマホからアクセスできる。チケットの購入、予約、あるいは組み合わせられた移動手段の予約、決済まで行える。



【ポイント】

- ・「自動車を所有せずとも移動できる社会」の実現を目指したビジョンを2013年に策定し、世界に先駆けて行政主導で進めてきた先進的な都市。現在では100万人以上の市民が「WienMobil」をダウンロードしており、日常生活に浸透している。
- ・モビリティハブには、電動アシスト自転車やカーゴバイク、カーシェアリングや充電ステーション、電動キックスケーター、情報端末などが配置されている。モビリティハブから様々な移動サービスを利用できる空間が提供されており、自家用車を保有することなく快適に暮らせる。

事例 2



「hvvswitchによる脱自家用車に向けたモビリティ拠点の整備」 (ドイツ ハンブルク)

市民に自分の車に代わる魅力的で柔軟で快適な代替手段を提供することで自家用車の使用・所有を減らす目的で整備されたモビリティサービス。

市内に点在するスイッチポイントで公共交通機関、レンタカー、レンタサイクル、電動スクーターなどが乗り換えられる。スイッチポイントは2013年から現在までに、地下鉄・国鉄の駅で17か所、市内に80か所以上設置しており、今後も増える予定。



【ポイント】

・拠点にはカスタマーセンターがあり、アドバイスを受たり、運転免許証を確認したりできる。事例ではカスタマーセンターのみの機能にとどまっているが、滞在型の店舗等を併設させるなどの展開が期待できる。

・公共交通機関である駅と、駅等から離れた住宅地の中にスイッチポイントを点在させ、補完的なモビリティサービスがすぐに利用できる場を提供している。

・一つのアプリで公共交通機関の乗り換え案内・時刻表の確認や乗車券の購入ができたり、シェアカー・タクシーの予約ができる。

事例 3



「まちに埋め込むモビリティハブ 実証実験」

(日産自動車・横浜市黄金町)

2019年10月26日～11月7日の期間に、日産自動車による実証実験として、**鉄道高架下空間に「日産モビリティハブ」を仮設的に設置した。**ハブ周辺の約2kmの範囲にある37カ所のスポットで自由に乗降できる移動サービスの提供と、**ハブにおける地域情報の発信**を行った。「モビリティハブ」という装置を活用し、**地域における多様で魅力的なスポットへの人の移動を増やし、地域の活動を活性化させることを狙い**としている。

【ポイント】

- ・高架下を木質の空間として設けるとともに、文字看板等を設置することで**地域拠点としてのランドマーク性を担保しながら、移動サービス用の車両が乗り入れ可能な空間デザイン**とした。
- ・実験の結果、横浜における主要な観光地だけではなく、**周辺部にある商店街や公園など、これまで当該地からの移動があまり見られない地域への移動を誘発**することができた。
- ・モビリティハブの実験以外にも地域のイベント（マルシェ）会場としても活用され、**地域拠点としての活用可能性の一端を垣間見ることができた。**

事例 4



「快適な時間を過ごせる電気自動車用充電ステーション」 (デンマーク)

建築設計事務所Cobeがデンマークで電気自動車用の充電ステーションを設計した。
太陽エネルギーを動力源とした超高速充電ステーションであり、15分で車両の充電が可能。電気自動車の充電は、ガソリンで車を充電するよりもはるかに時間がかかるため、ドライバーに休息とリラクセスの場を提供することを目指した。

【ポイント】

- ・北欧の著名建築事務所によるシンボリックな建物で従来の充電ステーションのイメージを一新した。
- ・木材モジュールの組み合わせで設計され、簡単に組み立て、取り外し、アップサイクル、および再利用でき、環境に配慮されている。
- ・車を充電している間、ドライバーは、近くのカフェでコーヒーを飲んだり、充電ステーションの中央にあるオアシスのベンチでリラックスしたり、快適な時間を過ごすための場所を作りだしている。

事例 5



Pantalla interactiva
Con información y selfie cam



Dispensadores de agua
Natural o caliente para el mate



「コミュニティの公共空間となる インテリジェントステーション (EMI)」 (ウルグアイ モンテビデオ)

市民が提案し市民が選んだプロジェクトに対する「市民の参加予算」を用いて2020年4月に複合型公共スペース（EMI）を整備した。この複合型公共スペースは、公共空間の提供だけでなく持続可能な環境への対応策ともなっており、雨水を集め再利用する施設や自転車の修理場、交通情報用スクリーンが設置されている。

【ポイント】

- ・中心にシンボルツリーのような機器を設置し、市民の憩いの場や避難所としての機能を兼ね備えている。具体的には、無料Wi-Fi、セルフサービスのタッチスクリーン、ウォーターディスペンサー、電子機器の充電端末など、市民にさまざまなサービスを提供している。また、ウルグアイ人にとって欠かせないマテ茶にも使えるお湯供給場も用意され、憩いの場も提供している。
- ・だけでなく、ニュース、イベタッチスクリーンでは公共交通機関の情報、興味のある場所をタッチスクリーンでインタラクティブに検索でき、都市を背景に写真撮影も可能。

1～2人乗りの小型モビリティの 事例について

▼観光ナビ付電気自動車貸し出しサービス「久米島Ha:mo」



▼「Times Car PLUS × Ha:mo」



旅のたのしみは、
すきま時間の
たのしみ方で決まる。

久米島は「ちょっとそこまで」が面白い！

「COMSを活用したマイクロモビリティシェアリングサービス「Ha:moRIDE」」（豊田通商）

Ha:moRIDEは一人乗り超小型EVを活用した“ワンマイルモビリティ”のシェアリングサービスであり、全国で様々な取り組みを実施。観光型MaaS事業「久米島Ha:mo」では町役場や観光協会他の協力の下、地元企業・地元ホテルと連携して運営。また、「観光ナビ」などのサービスを組み合わせ、島内の移動手段不足の解決および、観光振興・地域振興に寄与することを目指す。

「Times Car PLUS × Ha:mo」ではタイムズ駐車場と連携して既存駐車場のスペースを有効活用しつつ、利便性の向上を目指した。
※普通自動車免許が必要、最高速度60km/h

【ポイント】

- ・ちょっと乗るのに最適な“ワンマイルモビリティ”であり、徒歩や自転車で行くことが難しい『ちょっとそこまで』の場所にとっても便利。
- ・通常の車1台の駐車スペースに複数設置可能で、既存駐車場の余剰スペースの有効活用など、省スペースでステーションを確保できる。
- ・一人乗りの超小型電気自動車であり、車幅が狭く小回りがきくため、運転が苦手な人でも気軽に利用できる。



知能化技術がかなえる未来の暮らし

個人を認識してついでくる

Camera

好きな場所から安全に帰ってくる

「安全快適なパーソナル電動モビリティ ILY-Ai (アイリーエーアイ)」 (アイシン精機)

ILY-Ai は子供からお年寄りまで身体能力の差を感じることなく、より安全で快適な移動が行えるモビリティとして開発された。格好良く安心して乗れ、「誰もが使ってみたくなる」ことを目指した3輪の電動パーソナルモビリティ。大型複合商業施設での利用を想定したモビリティであることから、現段階では商業施設や空港内での実証実験にとどまっているが、自宅から商業施設までの一般歩道での実装も視野に入れ開発が進められている。

【ポイント】

- ・ ①立ち乗り、②座り乗り、③カートモードと3つのモードを1つのプロダクトに統合することで、子供からお年寄りまで安全で快適に利用できるモビリティとなっている。
- ・ 立ち乗りの際は、1.5人乗りを設定することで大人と子供が同乗可能。若者、親子連れ、シニアまでニーズに合わせた快適な移動を実現した。
- ・ シェアリング・レンタルサービスを念頭に自律走行・追従走行・安全機能等の知能化技術を開発中である。
- ・ 施設屋内走行時：最高速度：時速4 km、屋外歩道走行時：最高速度：時速6 kmと低速走行で安全性を確保。



「歩く速度とほぼ同じ時速5kmの
低速モビリティiino」
(ゲキダンイイノ (関西電力子会社))

「iino」は、市街地を時速5kmの低速で移動・巡回し、誰もが自由に乗降できる、自動運転型都市モビリティサービス。iinoに乗れば街の見方が変わり、街の再発見につながるなど、「ゆっくり」を基本として、利用する人に生まれる今までに無い体験や付加価値を生み出す乗り物を目指している。
床が低くて気軽に乗り降りできる「type-S」と、ゆったりと座って移動できる「type-R」の2タイプがあり、様々な実証実験を実施している。



【ポイント】

- ・神戸・三宮周辺の「歩きやすい街づくり」に向けた再整備にあたり、都心部のにぎわいや回遊性の向上を目指して「モビリティスポット」を歩道上に試験的に設置し、実証実験を実施した。ウォークブルシティにおける、歩き疲れや回遊性などの課題解決への寄与が期待される。
- ・宇都宮市の採石場跡地や農場などを食事付きで走行したり、会津で1日1人の旅を提供した実証実験の実績があり、点と点になっている観光地の間を結ぶ移動手段としても活用できる。





「廃線を再活用した電気トラム
Abacus」
(ドイツ北部・アイデアコンペ)
※フューチャーモビリティコンペティション

古いインフラストラクチャと廃線となった線路を再度利活用することにより、ドイツ北部の農村部と都市間との移動性の改善を目的に設計された電気トラム。

自家用車よりも快適で魅力的なモビリティの提案により、民間交通機関の必要性を減らすことを目的としている。

ドイツ北部では半数以上の鉄道が消滅・廃止されており、それらの路線の再活性化により都市部と地方との懸け橋としても期待される。

【ポイント】

- ・ 乗り降り自由なシステムで、乗客は手を振るという簡単なジェスチャーで電気トラムを停車させ乗車することができる。
- ・ トラムには大きな窓を設け、周辺の田園地帯の風景を取り込み、乗客の移動体験を向上させる魅力的な空間を提供している。また、乗客が寄りかかったり座ったりするための手すりが装備され快適性も担保している。
- ・ 床が低く、移動に問題のある乗客も乗り降りしやすい設計としている。また、車椅子のユーザーを支援するために格納式のスロープを使用できる設計となっている。



前回分析した駅前都市構造や用途面積の結果をベースに
苦小牧市と同等規模で大企業と繋がりの深い、
所謂企業城下町（苦小牧における王子製紙）で
街づくりに成功している都市をリサーチし、比較することで
苦小牧駅前に必要なもの、発展させていくべきものを
見出していきます。



○温泉・観光ゾーン
(粟津温泉、安宅地区)

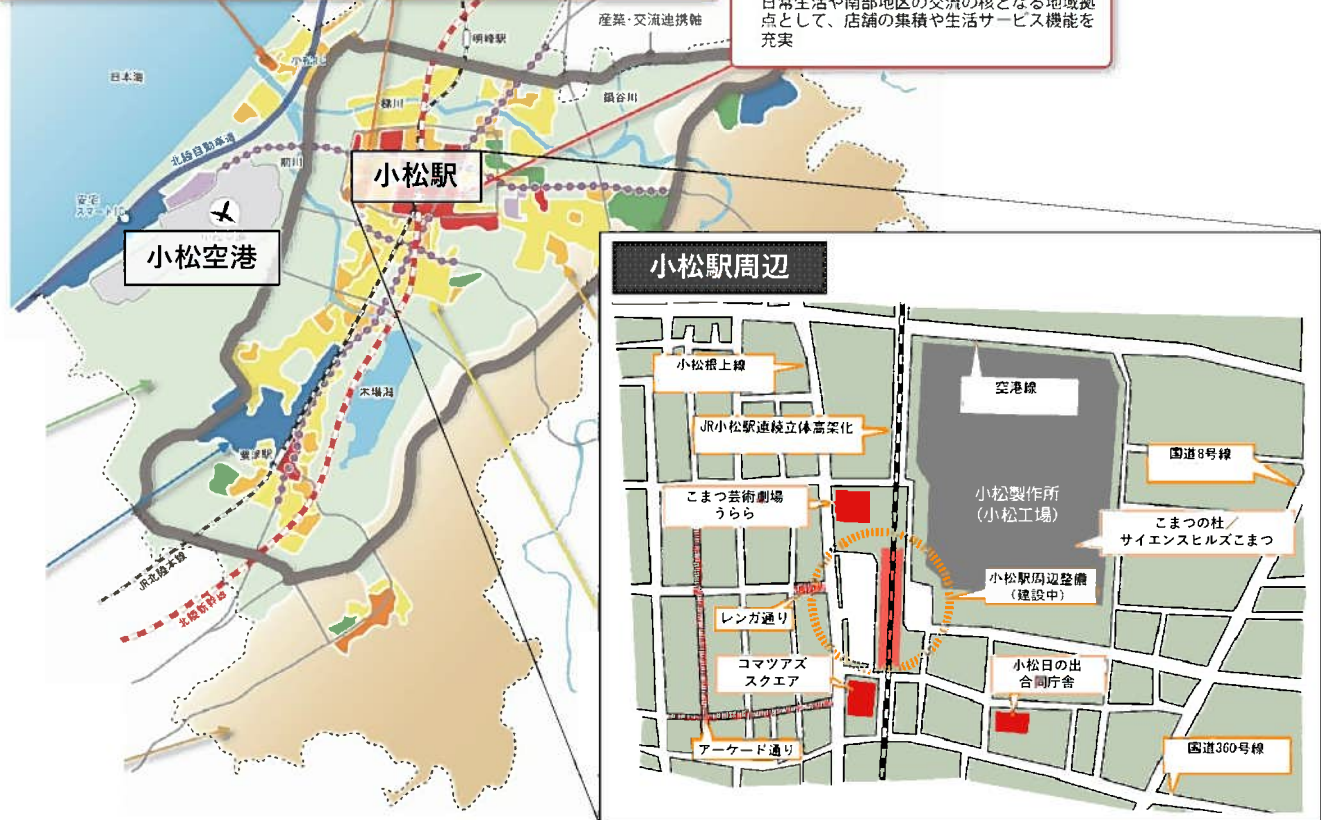
・歴史・文化特性を継承し、温泉街や観光地としての顔づくりや街並み修景等を推進し、国内外に向けた魅力向上、交流促進

○医療・健康増進ゾーン
(小松運動公園・市民病院周辺)

・緑地や自然環境を活かし保養地としての機能を充実し、健康増進、癒しの拠点形成を推進

○商業業務地ゾーン

・広域的な商業・業務機能の集積やターミナル機能の強化、市民や観光客が集い、交流できる空間を整備
・JR 粟津駅前などの地域商業地は、周辺住民の日常生活や南部地区の交流の核となる地域拠点として、店舗の集積や生活サービス機能を充実



石川県小松市

面積 : 371.05km²
 総人口 : 106,544人 (2022年4月1日)
 人口密度 : 283人/km²

建設機械メーカーの**コマツの企業城下町**であり、関連企業や工場も多い。そのため重工業が発達しており、北陸工業地域の一翼を担っている。

小松駅周辺の特徴 ※1日平均乗車人員：4,483人（2019年度）

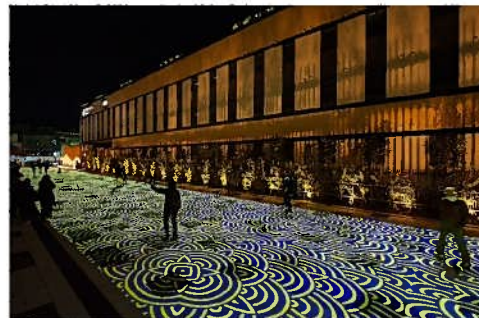
JRが市街地を東西に分断している課題があったが、**連続立体交差事業、駅東西の土地区画整理事業**を国、県、JR西日本、市が協力して推進した。2004年に整備が完了し、駅前広場やバスターミナルなど、まちの顔が生まれ変わった。西口側では2010年に閉店した小松大和跡地を再開発し、ホテルや大学が入った大規模複合施設が2017年に開業した。東口側には**2024年開業予定の北陸新幹線**の用地があり、2020年には「**変なホテル**」が開業している。

科学とひとづくりを目的とした 駅東：2013年開業
「サイエンスヒルズこまつ・こまつのだ」



古くからものづくりのまちとして発展してきた小松市における、「未来を創るひとづくり、ものづくり」をテーマにした科学館。みんなで楽しみながら、ものづくりの基礎となる理科や科学を学べるスポット。スマホやタブレットを使用してミッション形式のクイズを解きながら科学を学べるほか、様々な体験教室をはじめとするイベントも充実。

プロジェクションマッピングで心を魅了する
「こまつ80(ハチマル)スクエア」 駅東：2020年～



市制80周年を記念してJR小松駅の東口と、「サイエンスヒルズこまつ」との間のアプローチにて、全長70m x 幅10mのプロジェクションマッピングが、毎日、日没後から21時まで上映されている。煌びやかで幻想的なコンテンツに包まれ、市民をはじめ、ビジネス客から観光客にいたるまで幅広い世代を超えて、人々の心を魅了する空間となっている。

科学とひとづくりを目的とした 複合ビル「こまつアズスクエア」

駅西：2017年開業



国際学会やビジネス、研修旅行で、
多くの外国人が宿泊

学生たちが学ぶ
大学キャンパス、
国際文化を学び、
ショッピング・カフェを満喫

2010年（平成22年）6月に
閉店した百貨店「大和小松
店」跡地を解体・再開発し、
地上8階建ての**ホテル・大学
キャンパス・商業施設・行政
施設**からなる複合ビルが2017
年に開業した。

事業はコンサルティング会社が計画し、**特別目的会社が、小松
市と50年間の定期借地契約**を結び、建物の建設、保有、賃貸と
管理を行っている。総事業費のうち、約半分は銀行からの融資
で、ほか国と市からの補助金・残りは証券化を使ってプロの投
資家などから集めた資金を利用した。

目指している未来の交通イメージ

スマートな交通で、より安全、より快適に



自然エネルギー活用
のバスストップと
インフォメーション



自動でドライブ・ナビゲーション・事故防止

▲「NEXT10年ビジョン」より

取り組み

日野自動車と実施した「みんなでうごこう！
プロジェクト」らくらく通勤の実証実験



小松駅の隣駅である粟津駅が最寄の矢田野地区にて、地域全体で
支える持続可能な地域公共交通の構築を目指し、**LINEでの予約
に応じてバスを運行する実証実験**を行った。運行体制やコストの
課題はあるが、運転に不安のある方が不便を感じずに運転免許を
返納できる環境づくりや利用者同士の交流の場となった。